

吉田精一著作集 第二十三卷

現代文学と古典

昭和五十六年六月一二日 第一刷発行

定価 二八〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 及川 篤二

発行所 (株) 桜楓社

東京都千代田区猿樂町二一八一三

電話 東京 03 二九五―八七七―(代表)

振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八一年

Printed in Japan

審丁・乱丁本はお取替え致します。

現代文学と古典

* 吉田精一著作集
23

桜楓社

吉田精一著作集 第二十三卷
目次

I 近代における古典の連続と断絶

一 本書の意図と構成……………9

二 明治文学と古典……………24

1 馬琴と坪内逍遙……………24

2 近世戯作と簗村・紅葉・露伴……………36

三 自然主義と古典との断絶……………47

1 自然主義による否定……………47

2 島崎藤村と芭蕉……………54

四 昭和文学と古典の新生……………73

II 現代作家と古典

一 永井荷風と人情本……………83

二 谷崎潤一郎と源氏物語——「細雪」を中心に……………112

三 芥川龍之介と今昔物語——「藪の中」を中心に——……………127

四 室生犀星と王朝物語……………151

五 堀辰雄と王朝女流日記……………178

六 佐藤春夫と隠者文学……………200

七 川端康成と中世の幽玄……………229

八 三島由紀夫と中世能楽……………249

九 太宰治とお伽草子……………265

十 織田作之助と西鶴……………282

十一 石川淳と天明狂歌……………293

十二 田代文子と上田秋成……………311

十三 井伏鱒二と漂流記物……………330

*

第二十三卷 現代文学と古典あとかき

解説 吉田 鯉生

I

近代における古典の連続と断絶

一 本書の意図と構成

結局は実現しなかったが、かつて某書房が国語国文学講座を企劃し、私に倒叙日本文学史というものをわ
りあてた。倒叙とは、吉田東伍博士の「倒叙日本史」にヒントを得たのである。

この「倒叙日本史」は十巻の大著であるが、その序文に意図を説明している。

予は幼少より史類を嗜む。而も講読に師無し、其帝国の通史を独習する毎に、先開卷第一の上古が、茫
漠明滅として幻夢の如きに会ひ、頭脳徒に苦しみ、得る所少きを憾みたり。又、史家の筆力は、編末に至
れば多く衰殺し、吾人の現在、未来に対して、接近の關係ある重要時代は、却りて簡略に流るるを憾めり。
此に於いて、予は「近きより遠きに至り、低きより高きに登る」の方則（啓発法）を移して読史の一則と
為し、今代・近世を先とし、中世・古代を後にせば、前の憾或は除く可からむと思惟したり。既に、之を
以て自己の家法と為すに止まらず、此啓発法に合へる史書を編まむと欲す、則、時代自然の區別に觀相し
て、其一時期、一時代を以て各一編と為し、最近時より倒叙して古代に溯上し、以て史書の一変態に供へ
むと欲したり。予の此腹案は、実に二十年前に在り、而も其草編を終へずして他の著作に従事し、志を果
さざるや久し、……明治四十一年、再び倒叙史の改稿に着手し、今代の第一冊を國勢發展編と為し、次
に憲法制定稿、次に大政維新編、それより近世（略）中世（略）に溯り、古代（略）に終る。時代を分つこ

と十有五、……此十五編は、每編の叙述、其一時代の首尾を備ふるを以て、上古より中世・近代と順次に読下するに、固より錯乱の患無し。（かくすれば通史の順次に同一也）而も、予の倒叙編は、已に「明るき時代より暗き時代に及ばむと云ふ主義」と「近き世に詳にして遠きに省くと云ふ作略」並びに「各時代の色彩（當時の景観）と脉絡（前後の貫通）を、每編に呈示せむと務めし事」に於いて、多少の経営慘憺ありて、竊に倒叙の名称に合はむと期したり。……此倒叙史は、其一、二、三といふ編冊の次序を翻倒すれば、全く順列の通史と異なる無し。（略）

吉田東伍博士は、かの南北朝正閏論の問題の起ったとき、敢然として北朝正統説を立てた少数の学者の一人であつて、この倒叙史国勢発展篇中にも、「昨今、南朝正統を以て確立公定と為すは、權勢を以て歴史成跡の過去事実をも改作し得ると為す者に外ならず、其意想は、法律勅命の政治上に於ける改廃制作と、同一の程度に在る如し。やがて、權勢を以て国家の上に布く所の政府は、此潮流に乘じ、明治維新史の国定をも思ひ立ちたる如く、其史料採集費用を議會に請求して、容易に協算を得たり。是ぞ、立憲政府の上に超駕する藩閥元老の老後のうさばらしとして、こよなき慰安ならむぞかし、時勢の帰向また想はれて、あなかしこ。」（四九六―七頁）と痛罵の辞を吐いている。南北朝正閏論の史論上の正否はしばらく措き、北朝正統もしくは両朝並立の各論が、いたくこの際に維新の元老たちを刺激したことは、彼等が「大日本史」もしくは「日本外史」によつて南朝の正統を信じ、その信念のもとに維新の行動したのだから、当然といふべきだつた。元老中の元老、山県有朋などは、問題の内容をきいて驚きのあまり、全身に痙攣をおこし「桂は何をして居る」と激怒し、長文の詰問状を桂首相に出したという。南朝正統の結論は明治天皇の直接の決裁によつ

たのであるが、この勅裁については、山県の見解や運動があずかって大いに力があつたのである。（「山県有朋伝」下巻七七五—六頁）

同書の中で博士は又明治末期の社会主義抑圧に対しても、その非を論じて、

抑個人主義・私有主義を基礎とする現時の資本主義制度に在りては、国内合計の富は或は日に進むと雖も、而も其分配に与るものは、勢富人の階級に止まること明白なり。かくては、之に対抗せる泰西思想の一潮流、社会共産主義及び社会改良主義等の東邦に浸漸して、我門戸をも訪ふに至るも必然の数なり。殊に戦役後の人間に於いて感想を牽き易き者あり。而も本来、人類は孤立索居して生存し得べき者にあらず、故に社会共同の利益を図り、其利益の為に個人の自由を制限するは、單に社会共同の福利たるのみならず、又個人の正当なる進歩發展を図る所以なり。……（略）かの漫に排済、若くは庄伏の形迹あるは、各自私情主張の弊なるなからむや。（四八二—三頁）

と述べている。今日から見れば格別のことはなく、たんなる社会政策論者の立場を出ないとしても、当時の状況に於いて見るとき、その進歩的な発言たることを否定することはできない。又平田内相の地方官訓示に自然主義を「卑猥なる冊子」と評し、小松原文相が「不健全なる思想・文学・演芸」と難じたことに対して、それは明治の自由精神及び個人の権威尊重に発したもので、旧道德と衝突するは免れがたい、として、時代の必然的反映と解している。これを保守的に拘束するのは「此の世界を江戸時代もしくは奈良、平安朝に復古し、『神権愚民の政治』に立ち歸」らすものとまで評しているのである。

筆がそれだが、以上の博士の進歩的な自由主義精神が、在来の史家の「尊古輕新」的態度を排し、奈良・平安朝を上古編としてわずかに一冊を配当したのに対し、明治以降の今代史四十五年間に三冊をさいた理由でもあらう。三冊の近世史を見ても孝明天皇記二十年を江戸幕府衰亡編として一冊にあて、織豊氏時代以後を以てのち二冊にあてているにすぎない。その今代を重んじていることを知るべきである。

もっとも、博士もいつているように、「倒叙日本史」は編輯或いは執筆発表の順序を倒にただけであつて、順序を倒置して、逆に読めば、結局ふつうの正叙通史と変らない。して見ると倒叙の理由は、単に「近き世に詳にして遠きに省く」という原則に應じる一方法にすぎないともいえないことはない。その意味で著者自から憂いたように、「好みて異を立つる嫌無きに非ず」ということにもなり兼ねないのである。

勿論「近きより遠きに至り、低きより高きに登る」精神と目的は、我々が歴史に向いあう場合にも十分応用すべきものであつて、歴史哲学はつねに現在を基盤として構成されるのである。常に現代から後髪をひかれることによって、過去を正視する史観も生れるのである。そして又倒叙史が結局順叙史に帰することも、河の源から発して、河流の上流から下流に流れるように歴史として自然なのである。だがそれなれば、結局倒叙することにとどのような意味があるか。順叙する場合にも常に近代に目標を置くことによって、目的を達し得るとすれば、「低きより高きに登る」困難を敢えておかすより、「高きより低きに下る」容易な手段をとつた方が、賢明ではあるまいか。

それにもかかわらず私があえて倒叙日本文学史の項目をひきうけようとしたのは、こと文学に関する範囲としては、博士とは別のやや特殊な方法として成立しうるといふ、多少の目算があつたからであつた。その一つは、明治以後の近代文学が西洋との接触によって、はっきりと江戸時代から区別され、さては伝統の断

絶が云々されている、というより、伝統の断絶は自明のように見られている。しかし日本の文学であり、日本人の血液と風土とが変らない以上、何かそこに一貫するものがあるべきである。そうした関聯をさぐることによって、横の西洋文学との関係以外に、たてに、近代文学の血脈をさぐることが可能ではないか、と私はつねづね感じている。それには順叙法に従って、古典から発してその影響に及ぶことも一つの方法だが、逆に現代の文学をとって、その中に含まれている古典的源流に溯及し、兼ねてその中間の同種の系統の作品をもあわせ検することによって、いいうべくんば類型学（*typology*）的な重ね合せを行うことがより適切ではないか。博識と博渉を要することであり、容易なわざではないに違いないが、古典の現代的意義をさぐるためにも、誰かがやらねばならぬ仕事だと考えたのである。

しかしながらこのような態度に立つときは、よし文学史という限定された範囲を以てしても、通史はできない。通史ではいわば個性の一回的特質はみとめるとしても、結局それを一時代の波に漂わせることによって、その時代精神の一証券たらしめる、横の等質的觀念をある程度は流しこまねばならない。それに対し、この種のモルフオルギイ的操作にあつては、時代や社会をこえた、作品同士の等質性の置き重ねを行ない、それによって後出のものの原典に対する拡大、解釈、変形等を見定めることを基礎作業とする。勿論両者ともに一定の歴史的時代を負っており、その制約をうけているのであるから、その置き重ね作業に附帯して、各自の歴史性や社会的制約についての検討もなされなければならないが、中心目標はそれではなく、あくまでもすぐれた個性の間に於ける交通と影響関係のそれであつて、それを通じて現代と古典との脈絡をさぐることでなければならぬ。次には、そうした授受作用を必然的たらしめた事情を、被影響者たる現代の作家・作品に即して探ることではなければならない。従つて当該作家・作品の横との連絡即ち社会的意義とか、その

文学史的位置とかの定着は、この問題の追及を中心とする限り、勢い第二義以下になり、或は免除されるかもしれないのである。

次にこの態度方法によると、対象と内容に二つの限定をうける。一つはすべての重要な作家がとりあげられるか否か不明なことである。いや、それは或いははっきり不可能だといつてもよいかも知れない。少なくともこの方法による場合、古典的な作家、もしくは、何等かの意味で古典との連絡が目立つ作品に対象がしぼられる。古典といつても江戸時代以前を一応含むことを立て前とすれば、それは相当広範囲にわたるが、それでも猶かつその脈絡をさぐり得ない作家、作品の存在することは、想像に難くない。そういう作家であっても、たとい文芸作品の上での直接の授受ではなくとも、思想上、或いは人間形成の上で、深く伝統的思想の影響をうけている場合ならば、とりあげる必要があるが、単に一般的な意味での俳句的なものとか、或いは風土的制約とかいうことであれば、とり上げてもきりがなく、又意味があまりないともいえる。そうなること、ここで対象となるのは、そうした意味での伝統的作家と作品群ということに限局されるのである。

第二に、現代の文学に於いて、そうした古典との関係をさぐることは、必ずしも当の作家の本質的な性格や、中心的な命題を解決するとは限らない、ということである。たとえば古典のパロディ化の如きがありとすれば、それは時にその作家の一時のあそびであるかも知れない。或いはそうでないにしても、彼自身の地声で言おうとするものは他にあって、古典の世界は単なる背景もしくは素材の上にすぎないということも少なくないであろう。その場合にはそうした古典の摂取態度そのものを問題にすることによって、その作家作品の全体的な意義を多少髣髴せしめることができるかもしれない。しかし古典との関係をたどりうる作品のみが、その作家の最も高い業績だと限らない、ということとは、この操作の場合、その意義について若干の疑

義を挾ませうる重要なポイントである。これらの限界は、私のはじめようとする仕事をあらかじめ一つの中に入れておくことになる。このようなわくをもちながら、「倒叙日本文学史」と題することは、甚だ僭越であるようである。むしろ「現代文学と古典」とでも題すべきであろう。ともかく日本文学史の中にある綿々たる血脈を、或いは一本の、もしくは数本の青く通っている水脈を遡源することが、日本文学史の一つの課題であることはたしかである。古典とか伝統とかは単に昔あったものということではなく、我々の中に生きており、又生かせ得るものでなければならぬ。

最後に、私の目算では、当面の範囲から、いくつかの分野を除外する。第一に、歌、俳句である。これらの伝統的なジャンルは、当然古来の和歌、俳諧と切っても切れない関係にあるものであって、古典和歌、古典俳句との関連をさぐることは、無意義でないまでも、当然すぎるものをあなぐる意味で、今更行う必要は少ない。蕪村復帰をかけた子規、万葉再興をモットオにしたアララギに、天明俳句や、万葉との関連をことあたらしく言う必要はない。創作家としては、逆に或いは伝統の切りすてや訣別が、この分野には重要な事ではないか。同じ意味で、古典や歴史をまるのみにしている大衆的歴史小説、たとえば吉川英治の「新平家物語」以下の多くの作品は、価値的にはすぐれたものがあるけれども、これはそのみを一括して、別の観点から見て行く方が至当と思えるのであって、この際除外することにする。少なくとも現在それをやる必要がないとはいえないし、十分な意義もある。誰かが試みるならば喜んで読もうが、私自身は残念ながらそこまで行く余裕がない。それは歴史劇、歌舞伎脚本の場合でも同断である。

即ち一言でいえば私の考えているのは「現代小説と古典文学」である。そして古典文学を主とせず、現代小説を主として、両者の関係を見ようとするのである。といっても、いわゆる「精神の外遊」をこころみた